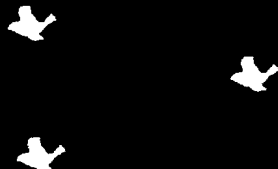


さらば夏の光よ



夏の光よ

遠藤周作

講談社

さらば、夏の光よ

一九七六年二月二十五日 第一刷発行
一九七六年四月二十八日 第三刷発行

著 者 遠藤周作

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 一―二―二

電話東京(03)九四五―二―二(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 遠藤周作 一九七六年

目次

プロローグ

5

南条の場合

46

戸田京子の手紙

86

野呂の手紙

203

装帧
辻村益朗

さらば、夏の光よ

プロローグ

お茶の水の駅で下車して、改札口に近い構内の電気時計を見る時は、必ずと言っていいほど、針は十時を十五分ほど過ぎていた。

（困ったもんだ。また遅刻をしたな）

舌打ちをしながら、私は学生たちの群れが流れていく駿河台の坂道をおり、それから日仏会館のある静かな屋敷町に向って歩く。

今日も講義時間に遅れ、学生たちは教室でブツブツ不平をこぼしたり、私の悪口を言っていると思うが、持前の癖で決して足を早めようとは思わない。

戦後の東京にこんな落ちついた静かな一角が空襲から焼け残っていたのかと思われるほど、この附近はしっかりと品のある屋敷が多かった。私はここを学校に出かける往き帰り、ゆっく

りと歩くのが好きだ。

本職はこうした教師商売ではなく、小説家であるから、こうした機会でもなければ放心したような気持で街の中を歩くという時間はほとんどなかった。

（学生が待とうが、待つまいが知ったことか）

そんなズウズウしい気持に駆られることさえある。

特に秋——銀杏いもぎょうの黄色い落葉が屋敷の門の前に散らばっている十月などは、もうこのまま教室に出ることをやめて、一時間でも二時間でもこのあたりをうろつきまわって帰ろうか、そんな気持にさせられるくらいだ。しかし流石さすがに義務の観念がこちらの怠け心を叱りつけてくる。子供のように頬をふくらませ、自分を待っている短期大学のB学院にむかって歩き出すのである。

学校の門の前には二、三人の女子学生が、まるで偵察兵のように立っている。のろのろとそちらに歩いていく私の姿を見ると、

「来たわよ。周作が」

「まあ心臓だわ。こんなに待たせて平気な顔よ」

「本当ね。周作ときたら」

そう叫びながら、バタバタと校内に駆けていく。

私は前から女子学生たちの間では蔭で「周作」と呼び棄てにされていることを知っていた。廊下などで、

「周作の授業がすんだら、お茶のみに行こうよ」

そんな友だち同士の会話が耳に入ってくるがよくある。

周作と呼び棄てにされても別に目に角をたてて怒る必要はないから、私は苦笑して黙っている。自分だって学生の頃は教師によくアダ名をつけたものだ。「ガンモドキ」「オコゼ」「アセラク、カシナン、パチン、プウ」

この長ったらしい最後のアダ名は、化学の教師に悪童たちがつけたものだ。この教師は気の毒にアバタだった。顔に沢山の穴があって夏になると汗がそこに溜る。そこで私は——いや、悪童たちは考えた。もし彼の顔に蚊がとまって汗に流し落されても、あのアバタの穴の中に入ってしまったって、パチンと叩いても、死なないでプウと飛び逃げてしまうだろう。だから彼のアダ名は「汗落、蚊死ナン、パチン、プウ」ときめたのである。

こんな思い出が自分にもあるから、今更女子学生たちに蔭で、

「周作」「周作のヤツ」

と呼び棄てにされても、怒る気にはなれぬ。いや、うるさい彼女たちを相手に怒るのも面倒臭い。

教室に入ると、みな澄まして机の前に坐っている。

このB学院は有名な女流歌人、Y女史の創設した自由主義の強い学校で、院長のN氏は戦争中もその信念を守り通し、戦後も個性ある教育で学生たちを育てていた。講師陣にも各大学の専門教授だけではなく、作家や評論家などもよんできている。私の授業は一応、フランス文学となっていたが、私自身は系統だった講義はせず、小説の味わいかたを、フロベールの『ボヴァリー夫人』という小説を講読することによって、学生たちに吹きこもうとしていた。

「今日は、この間のレポートを読んだ感想を言いますがね」

椅子に腰かけながら私は、先週みなに書いてもらったレポートを取りだす。

「その前に言うておくことがある。君たちはどうも誤字が多すぎるようだ。俺も誤字の多い男だが、その俺が読んでだよ、頭をひねるような字を書くのだから甚だ閉口です。第一だ。担任

の俺の名ぐらいは正確に書いてもらいたいと思うね。君たちの中には……」

私はチョークをとって、黒板に、

臭作

という字を書いた。レポートの中には担任講師の名を書きこむ箇所がある。大部分の学生は遠藤周作ときちんと正確に私の名をしるしてくれたが、中には週作だの修作だの勝手に字を変えた者がいる。だが、これなら我慢できる。我慢できないのは一人だけ臭作と書いた学生がいたからである。

「野呂君」

返事はなかった。

「野呂君」

出席簿をひろげて、私は野呂文平という男子学生が今日、この授業に欠席していないことを確かめた。

「来ているんだろう。野呂君は」

「はッ」

蚊のなくような声が教室の隅で聞こえた。大半は女性の多いこのB学院に数少ないが男子学生もまじっている。

ずんぐりと肥って、背のひくい、そしてまん丸な顔をした男である。

「君にきくが……なぜ君は俺の名を臭作と書いたのかね」

「それは……」

真赤になって、おどおどとしている。

「わざと書いたのか」

「いいえ、先生。うっかりでした」

泣きそうに懸命に返事するその表情をみると、別に悪意あつて臭作と書いたのではないらしい。なんだか憐れあはれになって、

（もう、よし、よし）

こちらもそう言いたくなってくる。

「君が、俺の名を醜作と書かなかっただけ……まだ感謝せねばならん」

私はそう発言して、教室の少し緊張した空気を中和させておいてから、授業にとりかかる。

私がこの男の名と顔とを憶えたのは、こうした一寸した出来事からだった。

私は紋切型の授業が嫌いだった。試験のために暗記し、試験が終れば耳の穴から飛びさっていくような知識を学生に学ばせようとは一向に思わなかった。だから私は、フランス文学を担当しながら、フランスの某作家が西暦何年に何処で生れ、何処で死んだなどと言うことを決して口にしなかった。後世の文学史家が便宜上、勝手にきめた何々主義というようなことも教えなかった。

「そういうことが知りたければ、本屋にそういう文学史や作家の経歴を書いた本が幾冊もあるから、それを読めばいい」

私は雀のような顔をしてこちらを見あげている学生たちにそう放言した。

「オウムじゃあるまいし、よその本に書いてあることをここでしゃべりたくはない。私は君たちにこの一冊の本をどう噛みしめるか、噛めばどう味がするかを伝えたい。一頁だって一行だって小説家は無駄に書いてはいない。なんのためにその一行があるか、一つ一つ考えながらみ

んなで読んでいこう」

たまにノートをとっている学生があると、

「よしたほうがいい」私はせせら笑った。「俺が言ったことをそのまま、レポートに書いたら零点だぞ。君は君自身のどんなつまらない感想でも書くべきだろう」

こうした授業はとても普通の大学で行えたものではなかった。学生たちの個性をのぼそうとするB学院だからこそ、私のような教師も首にしまったのだと思う。

授業中、私はしばしば脱線して、昨日みた映画の話や自分が今、読んでいる別の小説のことをしゃべることもあった。学生たちはそんな時、むしろ眼をかがやかせて、聞いているのである。

（いけねえ。また、道草を食っちゃった）

私が気づいた時は既に、授業時間はほとんど尽きていた。

「では来週。今度は真面目にやりましょう」

私はチョークでよごれた手をハンカチでふき、教室を出ていく。

屋だから、どこかで食事をせねばならぬ。幸い、学校のすぐ近くには作家たちがよく仕事場に使うマウンテン・ホテルという小さなホテルがあって、その食堂で手軽に食事ができた。

そこで、食事をしていると、たった今、教室で別れたばかりの女子学生たちの群れが次々と入ってくる。彼女たちはここでアイスクリームや珈琲を飲みながら、備えつけてあるミュージック・ボックスでレコードをきくのである。

「あら、周作だわ」

小声で彼女たちはなにかを囁きあい、時々こちらをチラッ、チラッとみる。

こちらではできるだけ知らん顔をしなければならない。別に気どっているわけではなかった。もし声でもかけて向うをこちらの卓子に呼ぼうものなら、彼女たちの飲食したアイスクリームや珈琲代まで、払わされるのが癪だからだ。馬鹿馬鹿しい。

女子学生たちもそれを感じているから、何とかして、こちらを注目させようとする。

「ちょっと、ごらんなさいよ」

「周作がライスカレー、たべている」

わざとこちらに聞えよがしの声を出して会話をつづけている。

「いつもライスカレーしか、たべないわね、彼」

「ケチなのよ」

「もっと高いものは注文できないのよ」

私はたまりかねて、そちらを睨みつけて、思わず言ってしまう。

「ツベコベ、うるさい奴らだな。ここは学生たちの来る所ではない。君たちはウッドン屋にでも行け」

「先生」彼女たちの一人が答える「ここでライスカレーを召上るくらいなら……もっと安くておいしいものを出す店がありますわ。馬鹿馬鹿しいわよ。ここにいらっしゃるの」

「本当かね」私は意地きたなく膝をのり出して「君たちはそこで食事をするのかい」

「そうですね。この食堂はただ、レコードをきいて、スマック・アイスクリームで何時間もねばるだけ。連れてってあげましょうか。先生」

そう言ったのは、髪の毛を長く垂らした女子学生だった。たしか、教室では左の壁ちかくに腰かけているが、もちろん、こっちは名前を憶えてはいない。

（悪くはないな。そういう店を知っておくのも）

こうして彼女たちは巧みに私を誘いだし、その店に連れていく。連れて行って飲んだり食べたり、笑ったり、そして結局、勘定書だけは私が払わされるのだった。